
CODE : HOLY

比奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CODE：HOLY

【Nコード】

N6945D

【作者名】

比奈

【あらすじ】

西暦2515年。惑星間航行、テラフォーミングを完成させた人類は、居住区域を宇宙へと広げた。新しく発足する政府や勢力。横行する暗殺。対暗殺者部隊、警視庁捜査課第十三係「暗部特捜」所属の刑事、日野蓮次は、暗殺者「CODE：HOLY」の助手として潜入捜査を開始する。三ヶ月間という限られた契約期間の中、蓮次はHOLYを逮捕することができるのか？そして、潜入捜査官と暗殺者との禁断の恋の行方は？

EPISODE 1「面接」

プリン、シナモンロール、ハラペーニョスナック、冷凍ピザ、アロエヨーグルト。

蓮次はメモを見ながらカゴの中身を確認すると、気だるい雰囲気を醸し出す、B系の服装をしたアジア系の少女の待つレジへと向かった。

「領収書を」

カゴを置きつつ、蓮次は言った。

「宛名は？」

バーコードを読み取りつつ、少女は蓮次に見向きもせずにはいた。

「英文字アルファベットで、CH」

「・・・・・・・・・・」

少女は無言のままだった。蓮次はその反応に戸惑い、一瞬息を飲んだ。

「かしこまりました」

蓮次は内心、胸を撫で下ろした。

少女はレジから吐き出された領収書をもぎ取ると、雑な字でCHと書き殴った。

「ありがとうございました」

無機質な声と共に、これまた雑に詰め込まれた紙袋が蓮次に渡された。

「あ・・・・・・・・領収書・・・・・・・・」

少女は差し出された蓮次の手に、乱暴に領収書を握らせた。

自動ドアを出ると、真夏の熱気が蓮次を襲った。

「あちいー」

ドア横の灰皿まで移動すると、紙袋を足元に放り出して、蓮次はタイトなスーツの内ポケットからセブンスターのソフトボックスを取

り出した。火を付けながら、手に持った領収書に目を通した。
何の変哲もない領収書。蓮次は首をかしげた。

宛名。但し書きはない。日付も、サインも不審な点はなかった。ますます首をかしげた。

値段は1216YEN。おかしくない。

セブンスターの二口目を口にしながら、気が付いた。そして、出てきたコンビニのある建物、その上のマンションに目をやった。

「1216号室……か」

時は西暦2400年代初期。

エネルギー資源の枯渇した地球を捨て、人類は宇宙へと旅立った。
月にコロニーが建設され、旧国連本部はコロニーへと本拠地を移した。人類は惑星間航行を成功させ、火星のテラフォーミングに乗り出した。

中期には、火星のテラフォーミングは完成され、続々と移住し始めた。同時期、地球の旧日本国の企業、KYOTOエレクトロニクスが水星、金星に強化ソーラーシステムの設置に成功。再び地球にエネルギーがもたらされた。

後期、一部の人類は地球に帰還した。これにより、人類の居住区は、月、火星、地球へと拡がりを見せた。が、同時に旧国連本部を中心とした月、旧アメリカ系移民が中心のフロンティア精神に溢れた火星、KYOTOエレクトロニクスの独壇場と化した地球と、それぞれの独立性を主張。こう着状態が続いた。

2500年代初期。こう着状態の続く三大勢力だったが、その緊迫した状況は、各勢力の要人暗殺の多発といった社会問題を生み出した。そして、暗殺業を請け負う者達も、増加の一途を辿っていた。そして2515年、夏。

地球の再東端の島国、旧日本。KYOTOエレクトロニクスの城下都市京都に首都の座を追われた魔都、東京。治安の悪化は著しく、

マフィアや犯罪組織の巢窟と化していた。その雑多な都市は、増加する暗殺者達の格好の根城となり、街には多くの闇の住人達が息を潜めて活動していた。

警視庁は、国連からの要請を受け、対暗殺者部隊を発足。警視庁捜査課第十三係・対暗殺部隊特殊捜査係、通称「暗部特捜」。

金髪のオールバック。真っ黒いタイトなスーツに身を包んだ、決して堅気には見えない青年。警視庁捜査課第十三係所属、日野蓮次は現在潜入捜査の真っ只中だった。この真夏のクソ暑い中、蓮次は三日間、この東京の街を右往左往していた。始まりは三日前。

ここ数年前から業界を賑わせていた新進気鋭の暗殺者「CODE：HOLY」。その暗殺者がこの東京に潜伏しているという情報が、第十三係にもたらされた。

情報によると、「CODE：HOLY」は東京でアシスタントを求めている。

現場からの叩き上げの刑事、日野蓮次はその経験とスキルを買われ、今回の潜入捜査に大抜擢されたのだった。

まず、火星ネットの片隅に転がっていた、たった二行の求人広告を拾うところからスタートした。

その広告に内蔵されていた暗号を一晚かけて解いた。その後、東京中の様々な場所を、まるで何かのゲームのように歩き回った。と、いうよりも、たらい回しにされた。

今では骨董品となった、デジタル信号で音楽を再生するディスクを扱っている小さな店で指定のディスクを購入し、とあるインターネットカフェの指定の端末でプログラムを解除。その頃には、蓮次も軽く嫌気がさしていた。

その端末から自動プリントアウトされてきたメモが、指定のコンビニでの指定の買い物リストであった。

蓮次は煙草を大事そうに根元まで吸い尽くすと、消えかかった吸殻を灰皿に放り込んだ。

オシャレに気を使う蓮次は、夏でもスーツを着込み、内側も長袖のワイシャツを着用していた為、この夏の日差しは非常に堪えていた。コンビニの裏手に回りこむと、マンションの住人用のエントランスが寂しそうに広がっていた。その奥のエレベーターに乗り込むと、12階のボタンを押した。

エレベーターに空いた、無数の弾痕を眺めながら、蓮次は微動だにせず静かに待った。何故なら、このエレベーターの空調は機能していなかったから。

扉が開くと、外気にも関わらず涼しく感じられる風が吹き込んできた。

「16号室・・・16号室・・・あった」

フロアのほとんどの部屋の郵便受けにガムテープが貼られている中、その部屋も他と全く変わらぬ様相で、蓮次の前に静かに佇んでいた。唾を飲み、蓮次はインターホンを押した。

機械的なチャイムの音が鳴り止み、再び沈黙が訪れた。蓮次の顎から汗が滴り落ちた。

ドアが少しの隙間だけ開いた。

そこから顔を覗かせたのは、女性だった。

蓮次は面くらい、急いで汗を拭った。

女性は目線だけで蓮次の身体を見回すと、最後にレジ袋に視線を落とした。ドアが開いた。

「どうぞ」

蓮次を中へ招き入れた。

「ありがと」

そう言うなり、彼女は蓮次の手からレジ袋をひったくった。

「あ・・・あの・・・」

狼狽する蓮次を尻目に、彼女はさつさと室内へと消えていった。

「何してるの？入って」

途中で蓮次を振り返り、彼女はスリッパを指し示した。

「あ……お、お邪魔します」

慌てて革靴を脱ぐと、フローリングに足を掛けた。綺麗に並べられた黄色いパイル地のスリッパに足を入れながら、蓮次は自分の足の臭いをチェックし、更にはスーツの内側の臭いにも気を回した。

まさか女性が出てくるなんて！蓮次は心底慌てていた。

女性は、美しかった。

廊下の奥にある、リビングらしきドアを開けている女性に視線を移し、蓮次の顔は更に上気した。

背は人並みだが、細身の身体。少し大きなヒップが魅力的だ。水色のキャミソールワンピースの下から、裾にフリルのついたスパッツが見える。

「こつち、どうぞ」

女性が振り返った。

「あ、はい！」

蓮次は駆け足で彼女の後を追った。リビングダイニングに足を踏み入れると、程よく冷房の効いた居心地の良い空間が広がっていた。淡いピンクや黄色を基調とした、整理された応接間。壁掛けタイプの大画面ディスプレイ、スチール製の食器棚、壁際には年代もののビュロー・机。部屋の中には、白いレザーのソファに囲まれた、雪豹柄のテーブル。その内装は、明らかに年頃の女性の部屋だった。「掛けて」

併設されたキッチンの中で、ペットボトルからグラスにお茶らしき飲み物を注ぎながら、ソファを指差した。蓮次も大人しく従った。蓮次は内心ドキドキだった。彼も人並みには女性経験があるつもりだ。今でこそ仕事が忙しく、また仕事柄の危険性を考えて恋人はいないが、過去には何人かの恋人だった。いた。

だが、あまりにも唐突過ぎた。まさか暗殺者を追って、女性の部屋

に通されるとは思ってもいなかった。

「CODE：HOLY」の恋人だろうか？いやいや、女房か？どちらにしろ、彼女は蓮次には刺激が強すぎた。

軽く褐色がかった肌。縦巻きカールのかかった長い黒髪。恐らくは東南アジア系が含まれているだろう、エキゾチックな顔立ち。年の頃は二十代前半だろうか。

何にしろ、女性に会う用意を何もしていなかった蓮次にとって、この状況は拷問に近かった。

「お使いありがと。どうぞ」

蓮次にはその意味が分からなかった。彼女は蓮次の前にグラスを置くと、蓮次の向かいのソファに腰掛けた。その手には、プリンとハラペーニョスナックが握られていた。

「あんたも食べる？」

スナックの袋を開けながら、彼女は蓮次の目を見て、嬉しそうに声を上げていた。

先ほどまでの印象と全く違う軽い口調。またもや蓮次は面食らっていた。いきなりなんだ、この慣れなれしい口調は。お堅い警察官の

蓮次は、その態度に少しムツとした。

「け、結構です」

「そう？」

言いながらスナックを口に運び、指に付いた粉を舐めとっていた。

その後、プリンの蓋を開けると、とても嬉しそうにスプーンで口に運んだ。

蓮次は固まったまま動けなかった。この状況が理解出来なかった。あまりにも不思議な状況。いかに現場で鳴らした彼といえど、この手の現場には不慣れであった。

蓮次が固まったまま動けずにいると、彼女はおもむろにソファの間から携帯を取り出し、なにやらいじり始めた。

典型的な若い女性だ。蓮次は内心頭を抱えていた。何もしないまま、彼女と向き合って座って、その彼女はプリンを食べながら携帯をい

じる。下手な合コンでもここまで気まずくはないぞ。

この気まずい空気を何とかしたい。蓮次が口を開こうとした瞬間だった。

「日野蓮次。今時珍しい、純日本人。プログラム解析、クラッキングの腕は上級。ここまで辿り着くのにかった時間は61時間。ランクは・・・まあA級かな、ギリギリだけど」

蓮次の心臓が跳ね上がった。

携帯を眺めながら、女性が呟くように喋り始めた。携帯を読んでいるのだ。自分の情報がそこに詰まっている。蓮次は戦慄した。

「経歴は・・・」

蓮次は極力平静を装った。

「月生まれの地球育ち。旧イギリスのスラムで幼少期を過ごし、COMの操作やハック、クラックの技術を習得。学生時代から犯罪組織ニームーンに加担し、現場での経験も豊富。現在は組織から離反し、フリーの傭兵を営む・・・か」

蓮次は内心安堵のため息をついた。

この任務に入る前に、偽の経歴をでっち上げた。髪も、それらしく金髪に染めた。この三日間、行動する時は全てこの偽の経歴、犯罪者日野蓮次を装い通した。

パターン。女性は勢い良く携帯を閉じた。

「うん、合格。あんたを今から助手に採用します」

「・・・」

蓮次は思わず沈黙した。

女性はおもむろに立ち上り、机の引き出しから厚いB5サイズの紙の束を取り出すと、蓮次の前に差し出した。

「これ、契約書と同意書だから、目を通してサインして」

「・・・」

蓮次は口を利けなかった。

「何？何か問題でも？」

再びソファに腰かけると、足を組んで汗をかいたグラスに口を付け

た。

「いや・・・問題というか・・・」

「じゃあ何？何か不満？」

「あの、俺はCODE：HOLYの助手に応募したんだけど・・・」

「そうよ。ここに辿り着く試験はクリアしたから、採用するの」

「いや、採用つて。まだ本人に会ってもいないのに」

「・・・」

女性はスプーンを咥えたまま、蓮次の目を見つめた。そして口角を上げると、ニヤニヤとした笑みを浮かべた。

「もう会ってるよ。蓮次君」

蓮次はハツとした。

「まさか・・・」

「そう。私がCODE NAME HOLYだよ」

CODE NAME HOLY 通称「CODE：HOLY」

数年前、彗星のように現れた新進の暗殺者。その仕事の成功率は現在100%。

KYOTOエレクトロニクスの役員や研究者を中心に暗殺を請け負い、時折国連の幹部や火星連合の幹部の暗殺を行う。

その技は圧巻。標的の喉元をナイフで掻き切り、死に至らしめる。

が、傷口は目には見えず、切り裂かれた内部は出血を起こし、うつ血して時間差で死に至る。そのスピードは音速。周囲はおろか、切

られた本人すら、いつ、どこで切られたのか認識出来ないほどだ。

現代暗殺者の暗黙のルールである予告状が届かなければ、その存在すら世間に知られることはなかったろう。

現代の現役暗殺者の中で、十本の指に入るほどの手練れである。

その現代のトップ暗殺者が、目の前にいる。

それが、こんな若い女だったなんて。確実に蓮次より年下だ。蓮次

は驚きを隠せなかった。

「驚いた？」

C O D E：H O L Yの問いに、蓮次は頷くしか出来なかった。

「まあね。この仕事を始めて、今まで一度もC O D E：H O L Yとして人に会ったことないしね。会ったとしても、皆もうこの世にいない」

C O D E：H O L Yはプリンを食べながら、嬉々とした口調で語った。まさに暗殺者。蓮次は背筋が冷たくなるのを感じていた。

蓮次は一時間かけて契約書と同意書に目を通すと、サインをした。内容は、至って普通のものであった。報酬について、心身の保障について、雇い主との関係について。

その間、C O D E：H O L Yと様々な会話を交わした。が、それは全て取り留めのない、歳相応の女の子の会話でしかなかった。話しが仕事の核心に迫ると、さりとかわして見せた。

分かったのは、彼女の本名がガブリエラ・ハジェンズということ、そして彼女が東南アジア系とアイルランド系のハーフだということのみだった。

蓮次は、契約書の内容に従って、今後この契約が切れるまでの三ヶ月間、このマンションで彼女と寝食を共にすることになった。

そして、仕事中はH O L Y プライベートでは名前で呼ぶことが義務付けられた。

彼の仕事は主にC O D E：H O L Yのサポート。外部から標的をモニタリングしたり、時には施設にクラッキングを仕掛け、H O L Yの仕事を円滑に進めるといったものだ。

「三カ月後、大きな仕事が控えてるんだ。向こう一ヶ月、私と一緒に仕事の訓練をもらうよ。二ヶ月目から、仕事の準備に入る。本番までに、必要な仕事は全てマスターしてもらうから、血反吐吐くつもりで頑張ってるね」

ガブリエラはニッコリ微笑んだ。

EPISODE 2「HOLYとガブリエラ」

KYOTOエレクトロニクス旧東ロシア支社。

同社きつての強権派である開発室長、エドガー・チャン。その日の彼は、旧東ロシア地区の開発チームへの激励を兼ね、講演会を行う為に同支社に滞在中であった。

午前。講演会の会場へ向かい、複数のSPを従えたチャンは明るいう廊下を歩いていた。前方から、女性SPがひとり。軽い挨拶を交わし、チャンらとすれ違った。

ホールにて、講演会は始まった。

同支社から少し離れたデパートの地下駐車場。ワインレッドのルノIR04200型の運転席。ガブリエラはティアドロップ型のサングラスをはずし、黒髪をほどいた。黒いネクタイを緩めながら、ナビシステムのレーダーで周囲を確認した。人気がないのを確認すると、彼女はゆっくりと航空自家用車を出した。

ベーコンエッグ、バタートースト、コーヒーの香り。留学の為月に旅立つ朝、母はいつものように、いつもの朝食を用意してくれた。妹は、恥ずかしそうに彼に猫の人形がついたストラップを渡した。それが彼のお守りになった。

月コロニーの進学校。蓮次は数人の友人達と、カフェテリアで昼食をとっていた。ひとりの教師が彼らのテーブルに歩み寄ると、蓮次に耳打ちをした。彼の顔から血の気が失せた。教員室で、一報を聞かされた。

つい先ほど、彼の両親と妹が、暗殺者の手によって命を落とした。

父は、KYOTOエレクトロニクスの役員を務めていた。

蓮次は地球の旧オーストリアの、自宅である屋敷に戻った。広いリ

ピングは白い百合の花で埋め尽くされ、その中央に黒い棺が三つ、静かに並べられていた。喪服に身を包んだ親族が、蓮次にそつと話しかけた。蓮次は棺桶の傍らに佇み、父の顔を覆う白い布をそつと剥ぎ取った。

蓮次は目を覚ました。

体中、汗にまみれて、心臓は激しく脈打っていた。シートもマットレスも、ぐつしよりと湿っていた。

「またあの夢か……」

蓮次は寝転がったまま額の汗を拭くと、小さなため息をついた。タオルケットを剥ぎ取り、彼はベッドに腰掛けると、枕もとの小さな台からセブンスターを取り上げた。

煙を深く吸い込み、彼は頭を抱えた。

啞え煙草のまま窓に近付くと、綺麗なレースのカーテンを勢い良く開放した。朝の日差しが蓮次の瞳を刺激した。眼前に広がるのは、今日もうだるような暑さを纏った東京の街だった。

蓮次の鼻が、おいしそうな香りを嗅ぎ取った。ベーコンエッグ、バタートースト、コーヒー。ドアの前に放り出してあったスーツが、キッチンとハンガーに吊るされていた。ワイシャツには綺麗にアイロンがかけられ、畳んで置かれていた。

「母さん？」

蓮次は急いで服を着込むと、部屋のドアを開け放った。

テーブルに用意された朝食。湯気のたったコーヒーメーカー。キッチンに立つその後姿に、蓮次の胸は高鳴った。

「おはよう」

その声に、蓮次の心は急激に萎びていった。

コーヒーメーカーからマグカップに注ぎながら、Ｔシャツにデニム姿のガブリエラが軽く微笑んだ。

「昨日は良く眠れた？」

「え……ええ」

蓮次の心は落胆したが、同時にひどく面食らい、その場に立ち尽くしていた。ガブリエラはキッチンから出てくると、仕草で彼をリビングに促がした。

「朝ごはん、食べる人？」

蓮次の前を通り過ぎ、彼女はテーブルにマグカップをふたつ置いた。エプロンはずししながら、彼女の視線は蓮次に向けられていた。

「ひょっとして、朝ごはんはいらなかった？」

少し困ったような表情で問いかけた。

「い、いえ。いつも食べてます」

その様子に、蓮次は慌てて口を開いた。それを聞き、ガブリエラの表情が華やいだ。エプロンをソファの背にかけると、彼女は席に着き蓮次を向かいのソファに促がしてみせた。

蓮次の前に並べられていたのは、卵をふたつ使った綺麗なサニーサイドアップのベーコンエッグ、バターがたっぷり塗られたトースト、小さなボウルに飾られたレタスのサラダ。先ほど彼女が用意してくれたコーヒーマグのカップ。

その魅力的な香りに、蓮次の腹は音で応えた。

「ふふふ、お腹空いたね。どうぞ」

「いただきます」

フォークを手に取り、蓮次はベーコンエッグを頬張った。ガブリエラも、ゆっくりと目玉焼きに手を付けた。

「でも、何で朝食なんか？」

口の端に白身をつけたまま、蓮次はガブリエラに問いかけた。

「え？どうして？」

無邪気な表情で、ガブリエラが尋ね返してきた。

「いや、だって。俺達は仕事上の関係であって、しかも君は俺の雇い主じゃないか。どちらかというと、俺が君に使われるべきだろう」「そうなの？」

蓮次の言葉に、ガブリエラは顔を赤くした。

「えへへ。私、他の人と一緒に仕事するの初めてだから、どうした

「いいか良く分からなくて」

彼女は視線を自分の皿に落とし、恥ずかしそうに呟いた。恥ずかしさを隠す為か、フォークの先でサラダのプチトマトを弄びながら。

「いや、いいんだ。いいんだ・・・」

蓮次の顔は真っ赤になった。彼もまた視線を落とし、トーストに手を伸ばした。

「シャツにアイロンかけてくれたのも、君？」

コクリ。ガブリエラは小さく頷いた。

「・・・ありがとう」

蓮次は小さな声で礼を言った。ガブリエラの表情に光が戻った。彼女もトーストを手に取り、小さな口でかぶりついた。

「失礼かと思っただけけど、昨日は蓮次君汗いっぱいいてたから洗濯してアイロンかけておいたんだ。靴下はまだ乾燥機に入ってたまだけど」

嬉々とした口調でガブリエラは続ける。蓮次の心の中で、何かが揺らめいた。

ふたりは取り留めのない会話を交わしながら、朝食をたいらげた。

蓮次はガブリエラの食事がベーコンのないただの目玉焼きだったことに触れた。肉が食べられない。ガブリエラの答えはシンプルだった。

ガブリエラがふたり分の食器を片付け、キッチンへと移動した。

「俺も手伝うよ」

蓮次の申し出を、彼女はやりわりと断った。

「片付けは私がやるよ。蓮次君はゆっくりテレビでも見ていて」

その言葉に甘え、蓮次はリモコンに手を伸ばした。

午前のニュースが大画面に映し出された。蓮次はそのトップニュースに釘付けになった。

「本日、午前八時頃、KYOTOエレクトロニクス本社開発室、室長エドガー・チャン氏が暗殺されました。同氏はKYOTOエレクトロニクスに所属していたとされています。」

トロニクス旧東ロシア支社に視察に訪れており、講演会を行った後、死亡。目立った外傷はなく、頸部内のうっ血が直接の死因とされ、予告状とその手口の特徴から、捜査当局は暗殺者CODE：HOLYによる犯行と断定。事件の解決に……」

蓮次はキッチンで洗い物をしているガブリエラを凝視した。まさか、いつの間に？

「ガブリエラ、このニュース……」

蓮次はカラカラの喉からやっと言葉をひねり出した。

「うん、そうだよ。蓮次君が寝てるうちに行ってきたの」

こともなげに、ガブリエラは言った。洗い物から目を離すこともなく。

全く気が付かなかった。蓮次も現場経験は豊富。仕事柄、睡眠時も神経は尖らせている。その蓮次に気付かれずに、抜け出したのか。よく考えれば、蓮次の部屋から服を持ち出したこともそうだ。蓮次には気付かれずに行った。

睡眠薬か？蓮次の脳裏に疑いの念がよぎった。だがいつの間に？昨夜はその可能性を懸念し、何も口にせずに床についた。薬を盛られる機会はなかったはず。

だとすると、彼女は蓮次が神経を尖らせている中、彼に悟られずに活動していた。これが一流暗殺者の技なのか。

「なぜ、俺に言ってくれなかったんだ？俺はHOLYの助手なのに」

「それとは別の仕事だったから。蓮次君はあくまで三カ月後の仕事のパートナー。それ以外の仕事には何の関係もないわ」

洗い物を終え、タオルで手を拭きながらガブリエラは笑った。無垢な笑顔。彼女の表情に嘘はないように感じた。

それだけに手強い。蓮次はこのヤマの難しさを、改めて実感していた。

「さて、じゃあ今から行く仕事には協力してもらおうかな」
ガブリエラの手が優しく蓮次の肩を叩いた。

自室から改めて出てきたガブリエラの姿に、蓮次の心は複雑な気持ちに襲われた。

美しさを際立たせるナチュラルなメイク。淡い赤のワンピースに、つばの広い白いハット。

肌の色と髪の色に絡み合い、絶妙な雰囲気醸し出していた。

ふたりは部屋を出て、地下駐車場に停めてあったガブリエラの航空自家用車、白いビートル5000に乗り込んだ。

蓮次は運転手を申し出たが、行きはガブリエラが運転し、帰りを彼が運転することになった。

彼女の運転で東京の空をドライブ。彼女はまず、東京でも比較的治安の良い、住宅街にあるファミリー向けのモールに立ち寄った。

ATMでマネーカードをチャージすると、彼女は大量の食料品や衣服を買い込んだ。蓮次は荷物を持ち、ひたすらに彼女の後について回るだけだった。

彼女のものにしては、サイズがあっているとはいえない衣服。食料の中には肉類が多く含まれている。それでも蓮次は口を挟むことなく彼女に従った。

これは彼女を、CODE：HOLYを知るチャンスだ。妙な詮索をすれば、彼女に不信感を抱かせかねない。しばらくショッピングモールを回ると、彼女は紳士服売り場の前で立ち止まった。

「蓮次君、ここ、好き？」

彼女が立ち止まったのは、国際公務員の給料では一生かかっても手が出ない、旧イタリアの超高級プレタポルテブランドだった。

「いや、好きというか」

「嫌い？」

「いやいや、デザインは好きだけど・・・」

「じゃあ、何でも好きな服選んできていいよ」

蓮次は仰天した。何を言っているんだ？この娘は。

「ほら、荷物おいて」

ガブリエラはベンチに荷物を置きながら、蓮次に微笑んだ。

「でもガブリエラ、俺・・・」

「服がないと不便でしょ？下着とか。私、男の人の好みよく分からないから、自分で選んできて欲しいの」

「ガブリエラ、分かってる？ここはすごい高いブランドなんだぞ？目玉が飛び出るくらい。俺には買えないよ」

ガブリエラは蓮次の目の前にマネーカードをちらつかせて見せた。心身の保障の一部。ガブリエラはそう説明した。

蓮次はおっかなびつくり値段を確認しながら、下着や靴下、部屋着に替えのワイシャツを選んでいった。値段を確認しても尚、その合計は蓮次の月給分ほどにまで昇った。

ガブリエラはその金額を一瞥ただけで、カードをスラッシュした。

モールを出ると、ビートル5000は西に向かうエアラインに乗り、東京、そして旧日本を後にした。

数十分の空のドライブを楽しみ、ふたりを乗せたビートル5000は旧モンゴルに辿り着いた。未だ開発が進行していない地区、スラムと言っているその地区の片隅。彼女はその一角にある、教会のような建物の前に、車を着陸させた。

ガブリエラが車から降りるとすぐに、教会のドアが勢い良く開いた。「わあー！」

歓声と共に、十数人にも上る子供達が、教会から飛び出してきた。

まだ幼い、年端もいかない子供から、思春期を間近にむかえた少女まで、年代は様々。彼らはふたりを、と言うよりもガブリエラを取り囲み、口々に歓声を上げ、彼女の名を呼び、ひとり残らず嬉しそうな表情を浮かべていた。ガブリエラも、小さな子供達を抱き寄せながら、笑顔を浮かべていた。

蓮次がその光景を前に呆然としていると、子供達の後に続いて、年齢を重ねた黒人のシスターが現れた。

「いらつしゃい、ガブリエラ。元気でした？」

シスターの姿を捉えたガブリエラは、子供達を降ろすと、シスターに走り寄って勢い良く抱きついた。

「お久しぶり！シスターロレイン、会いたかった！」

「まあまあ、そんなに強く抱きつかれたら、転んでしまいますよ、ガブリエラ。私もあなたに会えるのを楽しみにしていました」

ふたりは手を取り合い、しばし言葉を交わしていた。その間、蓮次の周りには子供達が群がり、物珍しそうに彼の顔を見上げたり、スーツの裾を引っ張ったりしていた。蓮次は困り果てて頭を掻きながら、子供たちに愛想笑いするしかなかった。

ガブリエラの指示で蓮次はモールで買ってきた袋を車から教会へと運び込んだ。

「ああ、ガブリエラ。いつもありがとうね」

シスターに促がされ、礼拝堂の脇にある食堂に荷物を運びながら、蓮次は教会を見回していた。古ぼけた、旧時代の石造りの教会。質素だが、整理された建物の中は、子供達の生活の息吹が至る所に感じて取れた。

孤児院。この教会は、まさしくそれだった。

ガブリエラと共にシスターは、年長の子供達と厨房へと消え、残された蓮次はしばらく幼い子供達ときこちない遊びを楽しんだ。

食堂の長テーブルに決して贅沢とは言えない食事が用意された。子供達は一斉に席に着き蓮次もガブリエラに促がされ、彼女の隣の席に着いた。シスターが食前のお祈りを捧げ、子供達もガブリエラも両手を合わせ、神様に祈りを捧げていた。蓮次も倣い、形だけでもお祈りを捧げた。

「さあ、皆さん。ガブリエラと、蓮次さんにもお礼を言いなさい」

「ガブリエラ、蓮次さん、ありがとう！」

子供達が声を揃えて礼を言った。

「では、頂きましょう」

子供達の食事はまるで戦争だった。シスターが行儀を注意すると、一瞬だけ大人しくなるのだが、またすぐに戦争に戻った。ガブリエラは笑顔で子供達を眺めながら、おいしそうに食事を楽しんでいた。食事が終わると、子供達がガブリエラの周囲に集まってきた。

「ガブリエラ、遊ぼう！お外で遊ぼう！」

口々にガブリエラを誘い、手を引っ張って彼女を連れ出そうとしている。ガブリエラは眉を下げ、シスターに目配せをした。シスターは笑顔で彼女に頷いた。

子供達に連れられ、ガブリエラが教会の外に出て行ったのを見送り、蓮次はシスターを手伝い、子供達の食べ散らかした跡を片付けた。ふたりで食器を片付けると、シスターは蓮次に深々と頭を下げた。

「いえ、僕は何もしてませんから」

蓮次は頭を掻いた。シスターは窓際の席にお茶を用意してくれた。ふたりが着いたその席からは、院庭で遊ぶガブリエラと子供達の姿が良く見えた。

「あの、ガブリエラはここによく来るんですか？こうやって」

蓮次はシスターに質問した。ガブリエラを知る人物。彼女の情報を得る、絶好のチャンスだった。

遠い目で院庭眺めながら、シスターは口を開いた。

「あなた、ガブリエラのいい人なのかしら？」

シスターの問いに、蓮次は狼狽した。そうか、そういう風に見られるのか。蓮次は少し間をおいてシスターに答えた。

「いえ、そういう関係では。なんていうか・・・友達、です」

「そう、お友達なの。あの子が誰かをここに連れてくるのは初めてだから、てっきり・・・」

「あ、すいません」

「いいのよ、謝らなくても。やっぱり、彼女はまだ・・・」
シスターの表情が曇った。

「あの、もし宜しければ・・・」

蓮次は緊張していた。うまくいけば、彼女の過去に触れられるかも

しない。

「・・・そうね。あの子がここに連れてくるような人ですもの。話しても大丈夫でしょう」

蓮次は内心飛び上がった喜んだ。極力平静を保ちつつ、シスターの言葉に耳を傾けた。

「ここはね、あの子が中学までを過ごした院なの。と言っても、一度離れ離れになってしまったから、あの子がこの建物で過ごしていたわけではないけど。あの子が私の元へ来たのは、10歳の頃でしたわ。彼女のご両親は、彼女が生まれてすぐに離婚なさってね、お母様に引き取られ上海で暮らしていたの。その頃、私の院もまだ上海にあつて、彼女と彼女のお母様とも顔見知りでした。ただ、当時の上海はKYOTOエレクトロニクスの土地開発の全盛期、ふたりが暮らしていたアパートは土地開発で取り壊され、転居を余儀なくされてしまったの。その後も、引越す先々を、KYOTOエレクトロニクスの開発によって追われ続け、ハジェンズ母子は安定した暮らしを送る事が出来なかったんです。ガブリエラが十歳になった年、彼女のお母様は過労で天に召されました。私は彼女を憐れんだお母様に生前、もし自分に何かあればガブリエラを引き取って欲しいとお願いされておりました。私はそのお気持ちに従い、ガブリエラを院に迎え入れました。彼女は上海の院で中学に進学するまでに成長しましたが、KYOTOエレクトロニクスを憎んでいた彼女は、同社に反感を抱く学生団体に参加するようになりました。そこで、団体の中心を担っていた当時大学生の男の子と恋に落ちたのです。ですが、それも束の間、デモ行進への同社の弾圧により、男の子は命を落としてしまったのです。彼女は絶望し、部屋から出ることもくずつと泣き続けました。そして、KYOTOエレクトロニクスの開発の手は、とうとう私の孤児院にも伸び、抵抗虚しく私達は院を解散し離れ離れになってしまったんです。ガブリエラとも、その時を境に離れ離れに。私は数人の子供を連れて、このモンゴルへと逃れ、この教会のシスターになる代わりに、ここを孤児院にする許し

を得たのです。その後数年、ガブリエラの消息すらつかめず、私達はその日生きるのに精一杯の生活を送っておりまして。そして二年前、突然ガブリエラが私達の元へ戻ってきたのです。たくさんのお物やお洋服を持って。それから毎月必ず一度、この院を訪れてくれているのです。今日のように」

シスターは喉を潤すように、お茶をすすって一息ついた。

「消息が知れなくなつてからの彼女は、どこで何をしていたんですか？」

シスターは軽く頭を振った。

「分かりません。彼女が何をしていたのか、そして彼女が今何をしているのか。彼女は話そうとしませんから。でも、いいのです。彼女が何をしていようと、彼女が間違つたことをしているとは思いません。私は、そして子供達も彼女が大好きなんですから」

日が沈み始め、ガブリエラと子供達が教会へと戻ってきた。

「ガブリエラ、泊まつていつてえー」

子供達がガブリエラの手をとり、口々に騒ぎ立てていた。

「ごめんね、皆。私はもう帰らなくちゃ。また来月来るからね」

まるで今生の別れのように、子供達はガブリエラにすがって泣いた。その一人ひとりに声をかけ、抱きしめると、ガブリエラは蓮次の元へと戻ってきた。

「お待ちせ、蓮次君」

教会の前で子供達に見送られながら、ふたりはビートル5000に乗り込んだ。見えなくなるまで手を振り続ける子供達。ガブリエラも、同じくずっと手を振り続けていた。

夜空を飛びながら、ガブリエラは余韻に浸っているようだった。

蓮次は、シスターの言葉を何度も何度も思い出していた。

「ガブリエラ」

蓮次が口を開いた。

「なあに？」

眠たそうな彼女の返事。

「孤児院に寄付してるのか？暗殺で稼いだ金を」

沈黙が訪れた。蓮次は横目で彼女を見やった。彼女は腕を組み、窓から眼下に広がる街の光を見下ろしていた。

ガブリエラの返事は返ってこなかった。

しばらく飛び続け、東京の光がふたりを包み込んだ。

突然、ガブリエラが口を開いた。

「汚かるうが、血まみれだろうが、お金はお金。あの子達がお腹いっぱいご飯を食われて、暖かいベッドで眠れるようになる。お金っていうのはそういうものですよ。どんな方法で稼いだとしても、お金自体には何の責任もないし、それを使うあの子達にも何の責任もない。汚れているのは、そういう稼ぎ方を選んだ私だけ」

力ない声で呟くと、ガブリエラは再び口をつぐんだ。
マンションの駐車場に乗り入れると、ビートル5000を停車させた。

「ガブリエラ……」

後部座席から、昼間買ったブランドの紙袋を取り出し、蓮次は彼女の前に差し出した。

ガブリエラはそれを受け取るために、静かに腕を伸ばした。

蓮次は紙袋を自分の方へ引き寄せると、小さく呟いた。

「ありがとう」

EPISODE 3「今にも落ちてきそうな空の下で」

HOLYの予告通り、蓮次の訓練は血反吐を吐くようなものにはならなかった。彼の訓練は基礎中の基礎。

プログラム解析、構築の復習。様々なクラッキングテクニックの習得。銃火器の基礎訓練。変わったもので、電磁波を用いたジャミングのオリジナルシステムの開発などだった。

毎日HOLYの指示の元、それらをこなし、日々はただ過ぎていった。

その間、世間でCODE：HOLYの名を聞くことはなかった。そして、ガブリエラの生活にも、なんら不審な点は見られなかった。時折出る買い物は、必ず蓮次を同伴させたし、ある時は、蓮次ひとりに買い物を頼んだ。

訓練に用いるCOMは、全てHOLYが普段用いている、彼女の私物を使用した。その中にすら、CODE：HOLYに繋がる情報は、一切含まれなかった。

何の変哲もない日常。いや、暗殺者の助手として過ごす日々が変哲もないと言えるか分らないが、それでも日常として時間は過ぎ、肝心な潜入捜査は完全な手詰まりだった。

その日も、蓮次はひとりガブリエラの使いでビートル5000を駆り、郊外のモールへと買い物に訪れていた。

メモを元に、彼女の好物を物色しながら店内を回った。一口にプリンと言えど、様々なメーカーから様々なタイプのものが販売されている。蓮次は彼女の最も好きな種類を、既に熟知していた。

買い物を終え、蓮次は吹き抜けのホールのベンチに腰掛けながら、ソフトクリームを堪能していた。

「調子はどうだ？」

蓮次の背後から、突然低い声が彼に話しかけた。

「特に何もありません」

何事もないように、蓮次は応えた。

彼の背後に座った男。蓮次と違い、決してオシャレとは言えないスーツに、だらしなく結ばれたネクタイの中年黒人男性。蓮次の直属の上司、警視庁捜査課第十三係所属の警部補、ロナルド・ネルソンだった。

「毎日毎日同じことの繰り返し。そっちは何か分かりました？」

「同じく、大したことはない。一応、例の場所に置いておく」

「了解」

蓮次が応えた時には、ネルソンの姿は既に人ごみの中に消えていった後だった。

蓮次はソフトクリームをたいたらげると、コーンの紙くずをゴミ箱に捨てにいった。くずを捨てると同時に、ゴミ箱の内側に張り付いていたミニチップを取り出した。

車に戻り、蓮次は早速チップを携帯に差し込んだ。

親愛なる日記様。という題名のブログが画面に展開された。CODE：HOLY及びガブリエラ・ハジェンズに関するレポート。親愛なる日記様、という題の意味はそれだった。

以下、本文

今日は待ちに待った乗馬試験の日。私の相棒は栗毛の可愛い牝馬、サニー号。私達はこの日の為に一生懸命練習を重ねてきたの。これから……

取り留めのない日記が延々と続いていく。蓮次は頭の中で暗号を置き換え、その日記を読み進めていった。

小難しい暗号の割には、内容は実に陳腐だった。蓮次の入手したCODE：HOLYの本名、生まれ、過去。それらが実在の人物、ガブリエラ・ハジェンズ本人であった。という分かりきった報告に過ぎなかった。その情報からは、彼女の空白の経歴、過去の犯行及び、

これからの犯行については何も引き出せなかった。

暗殺者の逮捕は現行犯が基本だ。一流になればなるほど、物的証拠や状況証拠を残さない。例えば今回のように、容疑者を特定出来たとする。ガブリエラ・ハジェンズの逮捕状をとって家宅捜索を行ったとしよう。そこに容疑者を暗殺者だと決定付ける何かを、果たして発見出来るだろうか？事件発生時、容疑者が現場にいたことを証明出来るだろうか？答えは否。実際、半月も潜入捜査を行っている蓮次ですら、彼女の口から自らが暗殺者CODE：HOLYだという台詞を聞かされただけで、確固たる証拠は何ひとつ掴めないでいる。潜入後に起こった事件ですら、彼はガブリエラが事件の起きた時間に本当に家にいなかったのかも分からないのだ。もしかしたら、彼女がCODE：HOLYだという台詞すら、ブラフかもしれない。仮に彼女の証言だけを元に逮捕したとしよう。だが、結局は自白のみが根拠の逮捕。証拠不十分で釈放がオチ。そうすれば、もう二度と潜入捜査は叶わない。

重要なのは、蓮次がCODE：HOLYと共に現場に赴くこと。現行犯で逮捕するしか暗殺者を立件する術はないのだ。

「三ヶ月・・・か・・・」

蓮次は車の外にでて、セブンスターに火を付けた。

「大丈夫ですかね？日野の奴」

通りを挟んだ立体駐車場から双眼鏡を覗きながら、小柄な白人の男がネルソンに話しかけた。日野蓮次の同僚、第十三係所属の刑事ゲーリー・ウッズだ。

「あいつは、大丈夫だ」

ハイライトをふかしながら、ネルソンが応えた。

「あいつ、もしかしたらHOLYにいかれちゃってんじゃないかね？」

「無用な詮索だ。あいつのことは俺が一番分かってる。あいつは俺

達の誰よりも暗殺者を憎んでいる。信じていればいい」

懐から携帯灰皿を取り出すと、大事そうに根元まで吸い尽くした吸殻を放り込んだ。

ウツズを残し、ネルソンは駐車場の闇に消えていった。

次の日、ガブリエラは蓮次を伴い外出した。今回は普段の生活必需品の買い出しとは違っていた。彼女は珍しく、蓮次を遊園地に誘った。

旧香港にある、キャラクターテーマパーク。数百年前から続く、世界的キャラクターテーマパークだ。

園内をはしゃぎながら歩き回るガブリエラは、年頃の女性そのものだった。様々な乗り物に乗り、お菓子を食べ、ショーを見た。ガブリエラにせがまれ、蓮次もねずみのキャラクターの耳付き帽をかぶらされたりもした。一日中遊び通し、ふたりが帰る頃には、日もトップリと暮れていた。

帰りの車の中、ハンドルを握る蓮次は、自分の耳を疑った。それは、ラジオのニュースだった。

「今日、午後三時頃、旧香港の遊園地内で、KYOTOエレクトロニクス第三研究室所属の研究員、イヴァーナ・トラスコット氏が暗殺されました。被害者は休暇のために同施設を訪れていたと見られ、予告状と手口から、暗殺者CODE：HOLYによる犯行と断定されております。予告状が送付されたため、同氏は複数のSPを警戒にあたらせておりましたが……」

「ガブリエラ、これは……」

「これも蓮次君には関係ない仕事。だから気にしちゃダメよ」

蓮次は奥歯を食いしばった。どういうことだ。今日は一日中ガブリエラと一緒にいたじゃないか。午後三時ごろ？ HOLYの手口から

して、犯行時刻は死亡時刻の約30〜60分前だろう。午後二時台の記憶を、蓮次は必死に探っていた。

その時間は、昼のパレードの真っ只中。ガブリエラは確かに自分と一緒にいたはず。だが、あの人ごみ。もしかしたら、あの人ごみの中に被害者がいたのかもしれない。

蓮次は自制心をフルに働かせて口を開いた。

「さすがはCODE：HOLYだな。全然分からなかったよ」

「……………」

ガブリエラは口を閉ざしたままだった。

マンションに帰っても、蓮次の気分は曇ったままだった。一体いつだ？

犯行もそうだが、彼女はいつたいいつ仕事を請け負った？彼女はいつ、どういった方法で、誰から暗殺の依頼を受けているんだ？

それすらも、彼には理解出来なかった。ガブリエラの入浴中に、蓮次は彼女の部屋を調べようかとも考えた。だがそれは出来なかった。そんな危ない橋は渡れない。やるなら、もっと慎重に、計画を立てなければ。

「お待たせ、蓮次君。お風呂どうぞ」

ガブリエラがバスタオルで髪を拭きながらリビングにやってきた。

「ああ」

蓮次も自室から着替えを取ると、浴室へと消えていった。

髪を拭きながら、ガブリエラは携帯を取り出した。

キッチンのゴミ箱へと近付くと、中から昨日食べたプリンの蓋を取り出した。ソファに座り、携帯のカメラで蓋に印刷されたバーコードを撮影すると、画面にはとあるサイトが映し出された。それは、プリンメーカーのアンケートサイトだった。

そのBBSにガブリエラは書き込みを行った。

「おいしかったです！」

書き込みを終えると、URLを削除し携帯を閉じた。キッチンへ移動し、再び蓋をゴミ箱に戻すと、ガブリエラは冷蔵庫からお茶を取り出して口をつけて飲んだ。

これで明日の朝には、彼女の口座に何度もマネーロンダリングを重ねた数百万の金回転がり込んでくることになる。

ガブリエラはドライヤーで髪を乾かし始めた。

「CODE：HOLY、約束の一ヶ月だ」

ある朝、普段通りにガブリエラの作った朝食をふたりで食べながら、蓮次はCODE：HOLYに向かって言った。

食事の手を止めずに、HOLYは蓮次に微笑んだ。

「そうだね。一ヶ月間お疲れ様。だいぶよくなったね。じゃあ、今日から仕事の準備に入ろうか。だけど、ご飯の後でいいかな？」

蓮次も頷き、ハムサンドを口に運んだ。

朝食を済ませると、HOLYの指示でふたりは外に出た。

東京。旧新宿区歌舞伎町。

現代東京で最も治安の悪化が著しい、悪鬼達の巣窟だ。その歌舞伎町のはずれ、明らかに怪しい植物や、ウイルスチップ、ポルノデータソフトなど、まとまりのない露店や小売店の並んだ路地。その中のビルのひとつ、吐瀉物が乾燥してこびりついたこ汚い壁の脇にある階段。HOLYに連れられ、蓮次も地下の闇を目指して降りていった。

階段を降りてすぐの鋼鉄の扉。まるで金庫の扉のような作りのドアを押し開けると、そこには想像していたよりもずっと明るい空間が広がっていた。

そこは古書店のようだった。現代では珍しい、紙を使った書物。壁中を埋め尽くした本棚の中には、いつの時代のものなのかも分からない本が、ところせましと並べられていた。

その店内を物珍しそうに見渡す蓮次を尻目に、HOLYは奥のカウンターに居座る老人の元へと真っ直ぐに歩を進めていった。

「いらつしゃい」

しゃがれた声の老人に、HOLYは尋ねた。

「あれ、用意できた？」

「もちろん」

老人はポケットの中から、一枚のデータチップとハンディCOMを取り出した。HOLYはそれらを受け取ると、そのCOMにチップを挿入した。ほんの数秒、画面を確認すると、チップを抜き取り、COMと一緒にポケットから取り出した札束を老人に手渡した。

その足で、露店に並べられた横流し品のハンディCOMを現金で購入し、ふたりは車に戻った。

HOLYの運転する車の中で、蓮次は先ほどのチップとCOMを手渡された。

「中身、チェックして」

蓮次は指示通りに、COMにチップを挿入した。

「これは・・・」

蓮次の目に飛び込んできたのは、どこかの建物の設計図、及びシステム配線図だった。

「KYOTOエレクトロニクス東京支社の見取り図よ」

HOLYはこともなげに言った。

KYOTOエレクトロニクス東京支社。首都京都の中心にそびえる本社に次ぐ、同社第二位の巨大ビルにして、地球第二位の規模とセキュリティを誇るモンスタービルだ。

「その見取り図と配線図を完璧に暗記して、その後私が指定した箇所のシステムのブレイク方法を完璧にマスターして欲しいの」

「全部？」

「そう」

蓮次はHOLYに目をやった。彼女は真っ直ぐ前だけを見据え、蓮次には見向きもしなかった。

「なあこの仕事、一体誰を狙うんだ？」

HOLYは答えなかった。

「今回も関係ない、か？それはないだろう。この仕事に関しては俺達はパートナーなんだ。俺だって、目的が何なのか知らなければ、いい仕事が出来ないだろう」

「・・・そうね」

HOLYは間近に見えた、ファミレスの駐車場に車を着陸させるとエンジンを切り、蓮次の目を真っ直ぐと見つめた。

「二カ月後、KYOTOエレクトロニクス東京支社に重要人物が視察に来るの。普段は本社勤務で、本社の外に出ることは滅多にないその人物が今回の標的よ」

「それって、まさか・・・」

「そのまさか。KYOTOエレクトロニクス代表取締役社長ウィリアム・クドー」

KYOTOエレクトロニクス代表取締役社長ウィリアム・クドー。地球最大の企業である同社の実権を握る人物であり、実質的な地球の支配者。強化ソーラーシステムの設置という、大偉業を成し遂げた先代にコンプレックスを抱き、自らの代での地球の独立及び再生の達成に異常なまでの執着を見せる、超強権派の独裁者である。

「ウィリアム・クドー・・・」

蓮次は絶句した。大きな仕事。大きいなんてもんじゃない。これは、国家転覆級のテロ行為だ。それだけじゃない。今までかろうじて保たれてきた三大勢力のバランスが一気に崩れかねない。そうならば、全面戦争の危険すら出てくるのである。

「そんな、誰から・・・」

「それはダメ。いくらパートナーでも、クライアントに関しては明かせない。分かるでしょ？」

HOLYの言うことも最もだった。警察官にも守秘義務がある。暗殺者にも、暗黙の守秘義務があって当然だ。依頼人の情報漏えいは、自分の命や仕事にも関わる

「ああ、そうだった。すまない、変なことを聞いて」
「気をつけてね」

「だが東京支社に、社長御大が標的か。ふたりで足りるのか？この仕事」

蓮次は頭の裏で腕を組み、遠くを眺めながら彼女に尋ねた。

「大丈夫よ、心配しないで」

彼女はキーを回しエンジンをかけた。

「無理でも、あんたは死なない」

エンジン音に紛れて彼女がそう呟いたのを、蓮次は聞き逃さなかった。

その夜、蓮次はベッドに寝転び、じつと携帯をいじりまわしていた。報告用チップを差し込んだその携帯の画面には、またあの妙なプログラムの画面が映し出されていた。

親愛なる日記様。

蓮次の捜査はここへきて大きな飛躍を迎えた。CODE：HOLYが行ってきた中で過去最大の仕事。いや、暗殺史上、過去最大といえる大犯罪。

もし今、絶対的な支配者を失えば、その座を狙った新たな支配者候補の乱立、抗争は目に見えている。そしてその混乱に乗じて国連、火星連合が一気に統制に乗り出してくる可能性もないとは言えない。その混乱を引き起こす元凶となり得る暗殺の情報を、ついに掴んだのだ。

蓮次は意気揚々と、報告書を作成していた。

今現在の状況では、具体的な日時や場所は説明されてはいない。だが、標的さえ分かれば、第十三係は充分な対策がとれる。ガブリエラは準備期間に二ヶ月を充てている。それだけあれば、第十三係にとっても万全な準備期間となる。

流れは完全に蓮次達に傾いていた。

ご機嫌にセブンスターをふかし、複雑な暗号を駆使しながら下らない日記を綴っていった。

ガブリエラの台詞を何度も反芻し、正確な報告を心がけた。彼女の言葉の意味を考え、曲解をしないよう。

報告の最後の一文を書き終えた時、蓮次は大きな満足感を覚えた。と同時に、とても複雑な気分に襲われた。

蓮次はベッドから立ち上がると窓辺に近寄り、不夜城東京を見下ろした。

なんだろう、この気持ちは。何かが引つかかる。その原因を、蓮次は本当は理解していた。

しかし、彼の中の刑事としての日野蓮次が、その理解に霧をかけていた。

ガブリエラが最後に呟いた一言。

その言葉を心の中で繰り返し試してみた。

そして強く首を振った。あの言葉に意味はない。自分を仕事のパートナーとして見た時に出た台詞だ。心身の保障の一部。彼女の意図はそれだけだ。

蓮次はカーテンに手をかけ、淀んだ街の景色を遮った。

チップに報告書を保存して、携帯から引き抜いた。

再びベッドに腰かけると、灰皿に吸殻を押し付けた。何か満足しない。すぐにもう一本口に運ぶと、火をつけた。

携帯を枕元に放り出し、深く煙を吸い込みながら、掌に乗せた小さなチップをじっと見つめた。

これでいい。このチップをいつものゴミ箱に貼り付ければ、全てが終わる。暗殺なんてさせない。もう、自分の両親や妹のような不幸な人間は生み出さない。もう、自分のような思いを誰にもさせない。その為に、蓮次は刑事になったのだ。

自分の行いは正しい。これでいいんだ。

チップをネクタイの裏側に差し込むと、明かりを消して蓮次は床についた。

いねでいいんだ。いねで。

EPISODE 4「風の吹く丘」

蓮次はその日も買い出しに出かけていた。いつも通りガブリエラの好物を物色し、いつも通りベンチに腰掛けたが、今日はソフトクリームは止めておいた。

「今日はアイス食わないのか？珍しい」

ネルソンの声が、背後から話しかけた。

「ええ、今日はちよつと報告がありました」

視線で周囲を何度も何度も確認しながら、蓮次は呟いた。

「報告はいつも通りチップだ」

ネルソンが答えた瞬間、彼の視界が黒いスーツで埋め尽くされた。

「どうしても話したいんです。直接」

蓮次がネルソンの前に立ちはだかつていた。その表情に鬼気迫るものを感じ、ネルソンは彼の要求を飲んだ。

ふたりは連れ立って立体駐車場へ上ると、人気のないのを確認し、更に念を入れて携帯の小型リーダーを作動させた。

「どういうことですか？ネルソン警部補」

蓮次は苛立ちを隠せなかった。しかしネルソンは何も答えなかった。

「自分の任務は、HOLYの元に潜入し、奴の仕事の現場を押さえ逮捕することだったはずです。それなのに、なぜですか？」

「上の決定だ。納得しろ」

ネルソンは冷たく言い放った。

「出来ませんよ！」

思わず蓮次は声を荒げた。が、すぐにネルソンに諫められ、蓮次は自分を抑えつけた。

「なぜです、なぜ。実行日まで潜入を続けて、決行の際に拿捕すればいいだけでしょう。なぜ殺すんですか？」

蓮次は、最後の一言を発する時、堪えきれずに肩を震わせた。

「いいか、日野。お前自身も分かっていると思うが、今回のヤマは国家転覆級の大犯罪だ。もはや暗殺などといった陳腐な言葉じゃ片付けられん。そして、このヤマは必ず阻止せねばならん。現場で押さえる、結構。だが、万が一でも取り逃したらそこでアウトだ、何が起こるか分からん。ならば、決行前に仕留める。それが最も確実な方法なんだ。分かるな？」

「・・・・・・・・」

蓮次は沈黙を守り、視線で訴えた。

「それに、この件に関して現行犯逮捕はない。分かるだろう？ 奴の標的は良くも悪くもこの星のトップだ。そんな人間を囚には使えない。このヤマはお前だけのものじゃない。俺達全員のものなんだ。

お前の勝手で俺達全員の首が飛ぶんだぞ」

蓮次の肩に、ネルソンが手を置いた。ネルソンは部署内の誰よりも蓮次を信頼し可愛がっていた。だからこそ、彼の気持ち痛いほどよく分かった。だが、ネルソンは甘やかすタイプの人間ではなかった。

「だけど、殺すことはないでしょう。まだ時間があります。俺が、俺が説得して見せます。自首するよう、なんとか彼女を説得しますから」

「蓮次よく聞け。奴は暗殺者だ、しかも凄腕のな。例えお前が説得して自首したとしても、奴は既に超S級犯罪者。極刑は免れんし、仮に情状の余地があったとしても、終身刑は確定だ。どちらにしても結果は同じだ。奴の人生に幕をひくのが、法か、俺達かの違いだけなんだ」

蓮次は首を振った。

「奴は凶悪な犯罪者なんだぞ」

ネルソンの言葉に、蓮次の内側の何かが切れた。

「彼女は、ガブリエラはただの犯罪者じゃない！」

その言葉に、ネルソンはハツとした。蓮次の胸倉を掴み、力強く引き寄せた。

「蓮次、もう一度言う。奴が自首しようが、しまいが結果は変わらないんだ。奴は罪を犯しすぎた。お前が奴を許しても、世間が奴を許さないんだ」

ネルソンの迫力に、蓮次は圧倒されていた。それでも、蓮次の心は折れなかった。ネルソンも、それを感じ取っていた。ネルソンは迷った。だが、その迷いを振り切り、蓮次に問いかけた。

「お前、あの女を抱いたか？」

蓮次は首を振った。

「ならまだ間に合う。お前は後戻り出来る。あの女のことは忘れるんだ」

ネルソンは蓮次の胸倉を放すと、彼に背を向けた。

「それがお前の為なんだ」

それだけを言い捨てて、ネルソンはその場を後にした。

それがお前の為なんだ。自分の言葉を、自分の中で何度も繰り返しながら。

ネルソンの携帯が音を立てた。

「はい」

「どうだ？交渉は決裂か？」

「はい」

ネルソンは短い返事で答えた。

「そうか、分かった」

それだけ言うと、相手は音を立てて電話を切った。

ネルソンと同じくハイライトを灰皿に押し付け、電話を切った男が部下のひとりに目配せをした。

ウツズだった。

「どうかしました？係長」

警視庁捜査課十三係長、ルーク・サリイスキーは、書類がうず高く

積まれた机に足を投げ出し、ウツズに言った。

「交渉は決裂だ。日野はHOLYを逃がす可能性が出てきた。すぐにS A Tに連絡をとれ。踏み込むぞ」

その言葉に、ウツズも混乱を隠せなかった。

「す、すぐ？ 今すぐ、ですか？」

「今すぐだ！」

サリイスキーの怒声が室内に響いた。

ビートル5000の運転席に飛び乗ると、すぐに携帯を取り出して、内蔵の骨伝道ホンを引き出した。親指の付け根に取り付け、すぐに車のエンジンをかけた。

警視庁の特殊無線ダイヤルにセットした。蓮次の脳に直接流れ込むように、無機質なやり取りが聞こえてくる。

「・・・S A T・・・直ちに・・・完了・・・」

蓮次は思い切りハンドルに拳を叩きつけた。

「あのクソ係長、こんな時ばかり真面目に仕事しやがって！」

蓮次は力任せにアクセルを踏み込んだ。

このモールからガブリエラのマンションまで、普通に飛ばして約15分。距離的に光速ギアドライブは使えないから、どんなに頑張ってみてもそれが最短だった。

「ガブリエラ・・・ガブリエラ・・・」

彼女の名を何度も呟き、彼は全速でビートル5000を駆った。

ガブリエラは自宅のソファに寝転びながら、昼の料理番組に見入っていた。彼女は超一流の暗殺者ではあったが、超一流の戦士ではなかった。

人を殺害することにかけて右にでる者はそうはいない。だが、自己の防衛に関してはその限りではない。ガブリエラ自身もそれを自覚

していた。だからこそ、他人との接触を極力断ってきた。自身の命を守る為には、自身ひとりで生きることが一番の近道だった。

闇に生きる者独特の勘が働き、今日という日がいつもと何か違うことは感じていた。それでも、それが何なのかということまでは、彼女には分からなかった。

ものの10分足らずで、第十三係長サリイスキーを筆頭に、警視庁特別狙撃部隊SATはガブリエラのマンションを包囲していた。マンションの周りのあらゆる建物に狙撃者が潜み、サリイスキーの号令を静かに待っていた。

ネルソンはひとり、愛車の運転席でハイライトに火をつけた。今日は、いつもにも増してその香りがまずく感じられた。たったの一吸いで、彼は吸殻の溢れそうな備え付けの灰皿に、火種をこすり付けた。

そして、時間だけが過ぎていった。

蓮次は駐車場に車を停めることを放棄した。ガブリエラの部屋の前に、直接車を乗り付けると、一時浮遊させたまま、運転席から廊下に飛び移った。

ポケットから部屋の鍵を取り出すと、無理矢理鍵穴に押し込んだ。焦りで、手がうまく言うことを聞かない。気持ちだけが焦っていく。鍵が開いた。

「ガブリエラ！」

蓮次は靴も脱がずに部屋の中へ駆け込んだ。リビングのドアを開け

ると、ソファに腰掛けた彼女が、キョトンとした表情で蓮次を見つめていた。

「ガブリエラ、早く！」

蓮次が彼女に近づく為に、一步踏み出した瞬間だった。

彼の視界が、一瞬だけ赤く染まった。

これは、レーザーポインター？蓮次は一瞬で理解した。
瞬間だった。

ガブリエラが動いた。

「蓮次君！危ない！」

彼女の動きが見えなかった。音速。蓮次が見たのは、自分の身体を揺らめく無数の赤い点の群れだけだった。

気が付くと、目の前にガブリエラがいた。ガブリエラの腕が、蓮次を突き飛ばした。

蓮次はリビングの外に尻もちをついた。同時に、リビングに窓ガラスの割れる音が鳴り響いた。

全てがスローモーションだった。

蓮次を突き飛ばしたままの姿勢で、まるで走っているかのような姿勢で、ガブリエラは蓮次に向かって手を伸ばしていた。

ガブリエラの左胸辺りに、赤い花が咲いた。咲き誇る薔薇のようにふたつ、みつつ、よつつ……

赤い花は次々と数を増やして、ガブリエラの身体の至るところに咲き誇った。

蓮次の顔に、赤い花びらが触れた。

ガブリエラが、蓮次に手を伸ばした。

蓮次も手を伸ばした。

ふたりの手が触れ合おうとした。

だが、ガブリエラの手は蓮次に届くことはなかった。

ガブリエラの身体がその場に倒れ伏した。

「ガブリエラ！」

蓮次は必死に膝立ちになると、彼女の元へと這い寄った。うつ伏せに倒れたガブリエラの身体の下から、おぞましい量の真っ赤な血が流れ出てきた。

「ガブリエラ・・・ガブリエラ・・・」

彼女の腕が、蓮次を押し倒した。蓮次は再び尻もちをついた。肘で上半身だけを起こし、ガブリエラが蓮次を見つめていた。彼女の口が動いた。

玄関から、窓から、武装したSAT隊員がいつせいなだれ込んできた。それぞれが手にもった銃を構え、蓮次とそしてガブリエラを取り囲んだ。

隊員の誰かが、蓮次の両脇から腕を掴み、彼をリビングから引き離した。

「やめろ、やめてくれ・・・」

蓮次は自分を掴むその腕を振り払おうと、必死にもがいた。だが、逆により強い力が蓮次の腕にかかり、彼はフローリングに押さえつけられた。

「やめてくれ・・・。ガブリエラ！」

一ヶ月間の特別休暇。

蓮次に言い渡された、非情な宣告。CODE：HOLYにまつわる一件からの、事実上の隔離だった。

CODE：HOLY死亡。

蓮次は自らを、事件を扱うマスコミの報道からも隔離した。マスコミは、大物暗殺者の死をこぞって採り上げるだろう。そして、暗殺者の正体についても。

ガブリエラを陵辱するような報道を、蓮次は見たくなかった。

旧東北地方のとある街の自宅に戻った蓮次は、一日中家に籠もるか、またはずっと公園のベンチで時間の過ぎるのを待つか、とにかく外界の情報には一切関わらない日々を送っていた。

その日も、蓮次は公園のベンチに腰掛け、遠くの山々だけを眺めて過ごしていた。

蓮次の目に映る山々を、円筒形をした物体が突然遮った。

「元気にやってるか？」

聞き覚えのある低い声が、蓮次に話しかけた。

ロナルド・ネルソン警部補だった。

相変わらずのだらしない服装のネルソンは、蓮次の隣に腰を降ろした。

「お久しぶりです」

言いながら、蓮次は彼の差し出した缶コーヒーを受け取った。

「毎日こうしてるのか？」

コーヒーを口に付けながら、ネルソンが口を開いた。

「ええ」

蓮次からは気のない返事が返ってきただけだった。

「…… HOLY の捜査は終わったよ。結局、被疑者死亡のま
ま、書類送検された。だけだ。あの女が HOLY だという事実も立
証されなかった」

「……」

蓮次は無言だった。

「安心しろ。あの娘については、マスコミには一切公表されてい
ない」

初めて、蓮次がネルソンの顔を見た。

「お前はうちの優秀な捜査員だ。うちのボスもそこまでバカじゃな
い」

蓮次は缶コーヒーの栓を開けた。

「俺……」

おもむろに、蓮次はスウェットのポケットから、一通の封筒を取り

出すと、ネルソンに差し出した。

辞表だった。

「・・・・・・・・」

ネルソンは動かなかった。代わりに、自分の懷から、一通の封筒を取り出した。

「これを読んでから、もう一度考えろ」

辞表の上に封筒を重ねると、ネルソンはゆっくりと立ち上がった。

そしてそのまま、公園を後にした。

蓮次は自分の手の上に置かれた封筒に目を落とすと、急いでその封筒の中身を取り出した。

時折スペルを間違える、ミミズがのたくったような、下手くそな字。蓮次はその鉛筆で書かれた字を何度も目にしたことがあった。買い物メモと同じ字。

ガブリエラからの手紙だった。

「
蓮次君へ

あなたがこの手紙を読んでいるとしたら、私はもうあなたのそばにはいないでしょう。

初めてふたりで孤児院に行ったあの日の夜、あなたが私に言った言葉。私もずっと、ずっとそのことを考えていました。

私があなたに言ったことは、嘘ではなかった。でも、それが全てでもない。始めは、私も自分の行いが正しいと信じていました。私から全てを奪ったものに、仕返しをしてやりたかった。でも、仕事を重ねる度に、私自身、自分の気持ちに自信が持てなくなっていた。私が何もかも失ったように、今度は私が誰かの何もかもを奪っている。誰かを殺すことが、そういうことなんだって、心の底では気付いていたの。でも、もう引き返せない。自分自身に言い聞かせない

と、私はまた何もかも失ってしまふ。私はそれが怖かった。

そんな時、あなたが現れた。蓮次君が暗部特捜の捜査員だったことは分かっていました。でも、私は嬉しかった。この人なら、もしかしたら私を変えてくれるかもしれない。悲しみが悲しみを呼ぶ連鎖から、私を救い出してくれるかもしれないと思った。それがどういう結果になるかは分からないけど。

私達が今控えている仕事。色々な意味で、これを私の最後の仕事にしたい。これが終われば、あなたはまた元の仕事に戻るでしょう。あなたの仕事は、色んな人の命を、幸せや生活を守る仕事だと思う。それは、私みたいな汚れた人間にとっても同じなの。多かれ少なかれ、私達暗殺者はきつとこの連鎖に気付いてるはずだから。私達を救えるのは、あなた達だけなの。

この仕事の結果がどうなろうと、あなたはあなたの道を歩いて下さい。迷わないで。

そして、私みたいな人間がまた生まれないように、見守っていて下さい。

叶うならば、あなたとはもっと別な立場で出会いたかった。それでも、あなたと出会えて本当に良かった。

私はあなたを、応援しています。

ガブリ

エラ・ハジェンズ

ー

それは、最後の事件の起きる数日前の日付で書かれた手紙だった。最後の一文。

淀みなく書き進められたその手紙の、最後の一文だけに、消しゴムの跡があることに気が付いた。

蓮次は、手紙を陽の光にかざした。

一度書いて、消された言葉が浮き上がった。

私はあなたを、

愛しています。

蓮次はベンチに倒れこみ、声を上げて泣いた。

旧モンゴル。

教会の前に黒いステーションワゴンを着陸させた。食べ物や衣服の袋を取り出していると、教会の中からシスターロレーンが、蓮次を出迎えた。

「あなたおひとりでいらつしゃったということは、もうガブリエラはここには来ないのですね」

シスターと蓮次は教会の裏手の丘を歩きながら、会話を交わしていた。

「・・・・・・・・」

蓮次は、何も答えられなかった。

「彼女も、やっとお母様と再会できて、喜んでいると思います」

言い終えると、シスターは軽いため息をついた。

「シスター・・・」

蓮次が口を開いた。

「俺、俺……すみません」

蓮次はうつむき、言葉に詰まりながら、やっと言葉を搾り出した。

「……私には何があったのかは分かりません。ですが、最後にあなた達が訪ねてきた時の彼女の顔を見れば、分かります。彼女は幸せでした」

「幸せ？そんなはずないです。俺は、俺は彼女に何もしてやれなかった。もつと生きられたのに、俺は……」

シスターはニツコリ微笑むと、蓮次に向かって軽く首を振った。

「確かに彼女の人生はとても長いものとは言えませんでした。ですが、だからと言って、彼女が不幸だったとは限りません。蓮次さん、あなたは私達人間が、何の為に生きているのか、考えたことがありますか？」

「……」

シスターの突然の問いに、蓮次は沈黙で返した。彼女の問いに当てはまるような、明確な答えを、蓮次は持っていなかった。

「そうでしょう。私だって、すぐには答えられません。きっと、永遠に誰も答えを出せない、神様からの宿題なのかもしれません。でもね、ガブリエラの顔を思い浮かべると、思うのです。彼女は短い時間でしたが、子供達や私の心に、たくさんの思い出をくれました。そして、あなたの心にも」

言って、蓮次の左胸に手を置いた。

「彼女が生きた意味があるとするならば、あなたのここに、今も残っている。ということですよ」

「俺の、中に……」

シスターは蓮次に背を向け、院庭で遊ぶ子供達を見下ろした。

「彼女を幸せな女性にするのも、不幸な女性にするのも、全てはあなた次第なのです」

そう言くと、シスターは先に丘を下っていった。

丘を、風が駆け抜けた。

蓮次は丘の頂上に、小さな石で墓石を立てた。
誰も知らない、蓮次だけの墓石。

蓮次はその墓石に通の封筒を立てかけると、その丘を後にした。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6945d/>

CODE : HOLY

2010年11月9日20時16分発行